

「義務だから」なんてもったいない！ オープンアクセスで世界を幸せにしよう

～国のオープンアクセス基本方針をきっかけに
改めてインターネット時代における大学図書館の役割を考える～

京都大学附属図書館 研究支援課長
野中雄司

55

Slides

2025年度 大学業務ソリューションセミナー
～他大学の先進的な取組を共有し大学の未来を拓く～

2025(令和7)年12月11日(木)

@早稲田大学アカデミックソリューション 大隈スクエアビル

北海道大学
附属図書館

13年

係員10年
係長3年

室蘭工業大学
附属図書館

3年

係長3年

東京大学
附属図書館

4年

係長4年

富山大学
附属図書館

3年

課長3年

京都大学
附属図書館

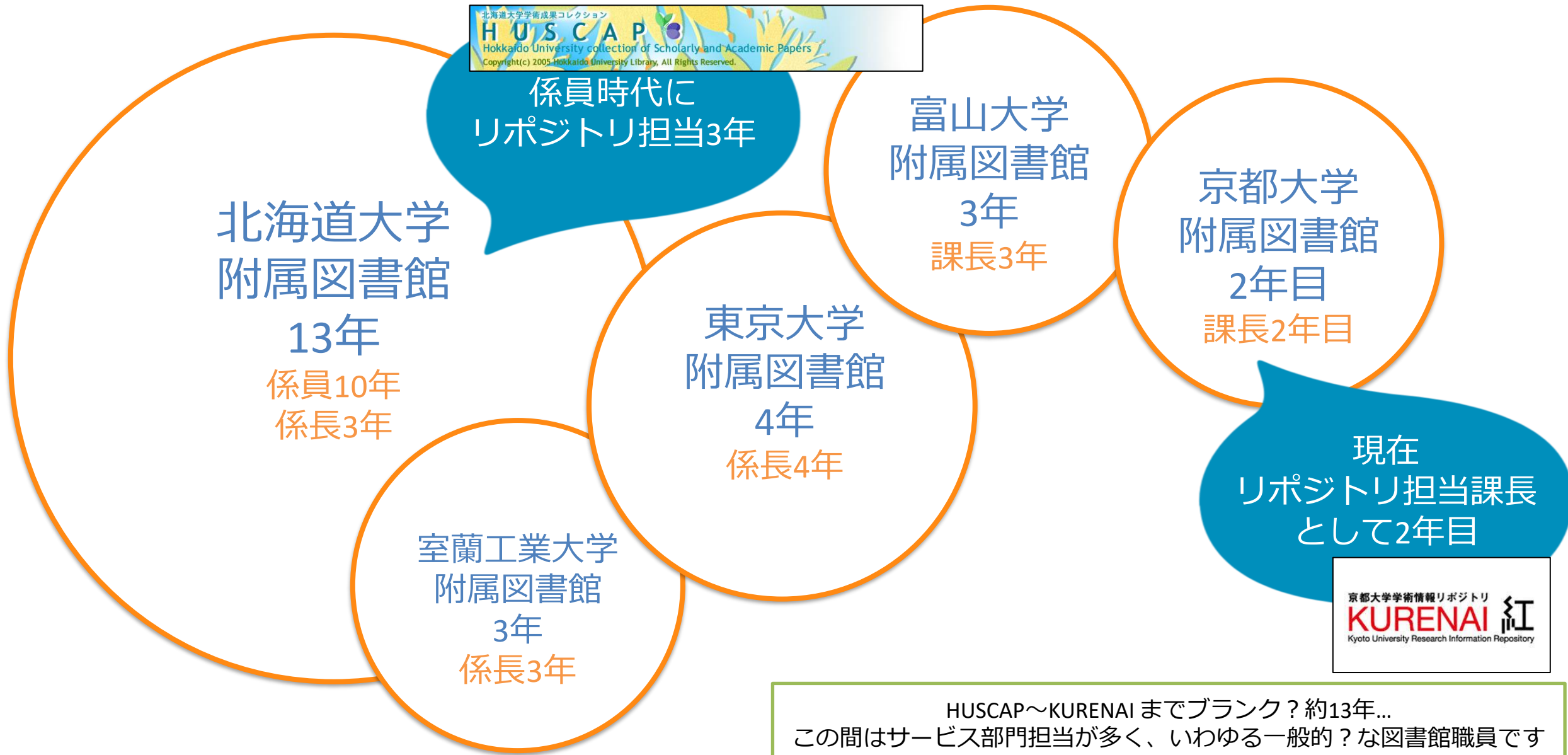
2年目

課長2年目



2025年9月
アレキサンドリア図書館@エジプト

自己紹介（機関リポジトリとの関わり）



本日のお話しの概要（+αでご依頼いただいたもの）

【本日のお話しの概要（本セミナーウェブサイトより）】

国のOA基本方針が定められました。この方針を一つの切り口として、改めてインターネット時代における大学図書館の役割を考えます。

「機関リポジトリの本来的な意義とは何なのか？」「なぜ大学図書館がオープンアクセスに関わるのか？」などについて、京都大学での事例も交えつつ共に考え、さらにそこから私たち大学図書館にできることは何なのかを共に考えます。

【+αの主催者様からのご依頼内容】

機関リポジトリでの登録・公開について、「何から手をつければよいか」と課題を感じている大学職員の方が多いかと存じます。つきましては、研究者を支えるお立場でのご経験に基づき、「具体的にどう進めればよいか」をお話しただけですでしょうか。また、この中で JPCOAR にて実施されているコミュニティ醸成活動についても情報提供いただけますと幸いです。

本日の シナリオ

1

機関リポジトリの意義と大学図書館の役割

2

京都大学では何をしているの？

3

コミュニティで力をあわせて！

JPCOARコミュニティの紹介と機関リポジトリのやること整理

4

まとめ

1

機関リポジトリの意義と大学図書館の役割

話者私見です

改めてオープンアクセスの意義とは？

義務化はされたけど、国のOA基本方針の目的も

「公的資金によって生み出された研究成果を広く国民に還元するとともに、その共有・公開を通じて自由な利活用を図り、科学技術、イノベーションの創出及び地球規模課題の解決に貢献すること。」

誰もが反対のしようがない理念、目的であり「義務だから」ではもったいない！

大学図書館にとっても貢献度を高められるチャンス！

改めて機関リポジトリの意義とは？

機関リポジトリの意義（基本）

機関リポジトリとは？

□ メリット

学内研究者

- 新たな発信ルート の獲得
- 研究成果のビジビリティ(可視性)向上
- 論文データ等の一元的管理と
長期的保存の保証

大学

- 説明責任の履行
- 管理体制の構築
- ブランディングの向上

一般利用者・研究者

- 研究活動への貢献
- バリアフリーなアクセス環境
- 研究スピードアップ

「義務化」にあたり、改めて機関リポジトリの意義を再確認しつつ、
機関リポジトリにおける大学図書館の役割も考えてみる

赤線（話者追加）

大学図書館関係の最新政策文書でも

オープンサイエンス時代における大学図書館の在り方について (審議のまとめ)

(文部科学省科学技術・学術審議会情報委員会オープンサイエンス時代における大学図書館の在り方検討部会(令和5年1月25日))

1 丁目 1 番地に以下の記述

(1) **今後の大学図書館に求められる教育・研究支援機能や新たなサービス**について

【ポイント】

大学図書館は、今後の教育・研究における利用に適した形式で既存のコンテンツのデジタル化と、**学術研究等の成果として今後産み出されるコンテンツのオープン化**を進める。(以下略)

大学図書館関係の最新政策文書でも

さらに「**大学図書館の本質的認識**」として

大学図書館は、情報やデータ、知識が記録されることを前提として、大学における教育・研究の文脈においてそれらの発見可能性を高め、アクセスを保証し、また利活用できるようにすることで
継続的に知が再生産されるようなシステムを維持するために存在する
との本質的認識に立っていた

と記載されている。

なぜ「コンテンツのオープン化」をすすめるのか、を考えるにあたって、
改めて「知が再生産されるようなシステム」を振り返ってみる

「知の再生産システム」の現状認識

(「コンテンツのオープン化」の意義を考えるために)

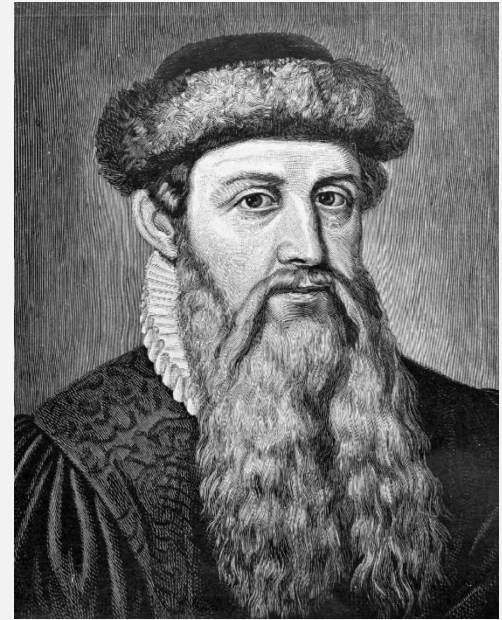
約500年前～20世紀末（グーテンベルク革命～デジタル革命前夜）

第一の情報爆発

＜生産→流通→消費＞の時代

文字やイメージの大量複製と流通、その消費のシステム

- 大量複製型のメディア文化がより多くの大衆を巻き込んでいくことで発展するという時代
- マスメディアの活躍（話者追加：旧来の学術出版者も？）
- その時代は終焉しつつあり、オールドメディアの最盛期は過ぎた



グーテンベルク



20世紀末～現在 (デジタル革命)

第二の情報爆発

- ・ インターネットの発達によりネット社会が出現。すべての人が発信者になれるようになった。
- ・ コンテンツが大量複製されて一斉に伝播・流通し、消費されていくというマス・コミュニケーションの回路総体を変えていく。

デジタル革命による地球規模の情報爆発

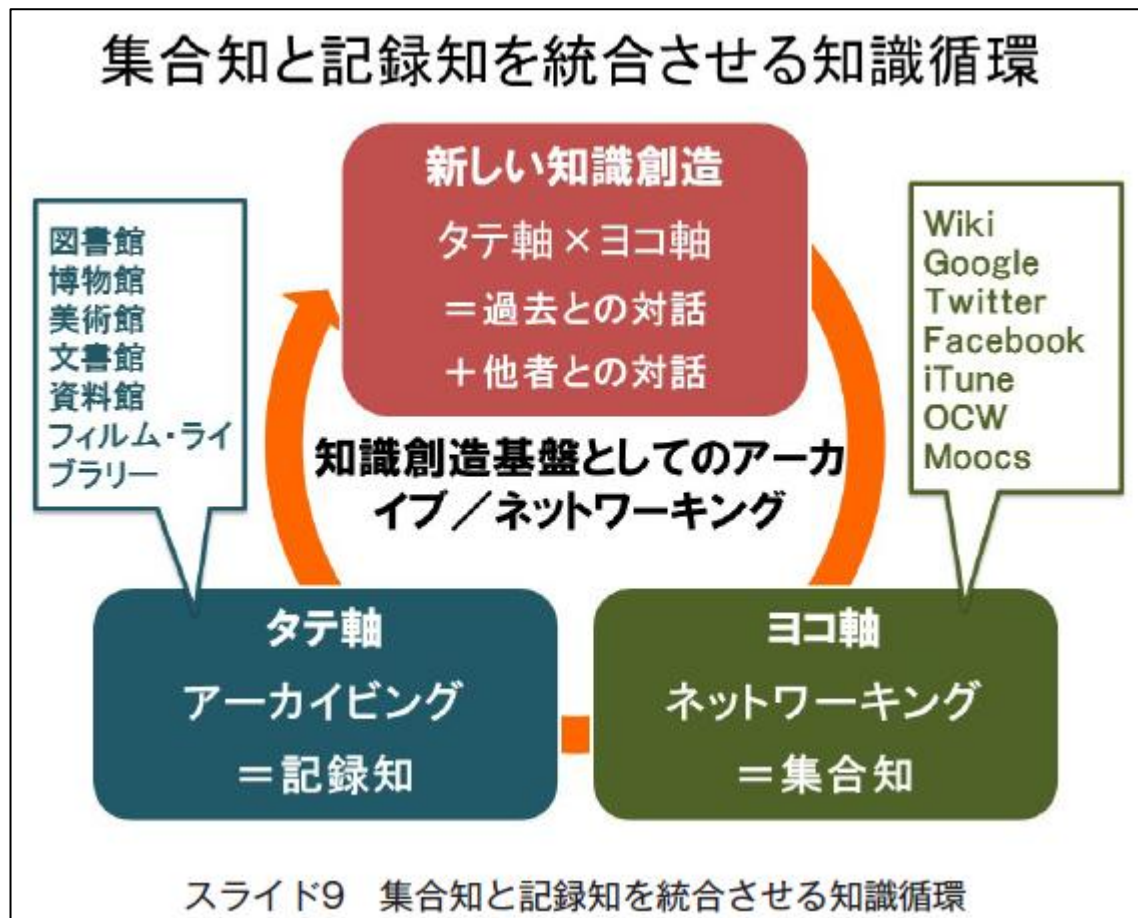
- ・ 情報廃棄物が日々蓄積
- ・ 適切に保存し、再利用していく循環型システムが必要

＜蓄積→検索→再利用＞への転換

知識のリサイクル型の再生産プロセスが、これまでの消費型のプロセスを補完しつつ、影響を拡大させていく

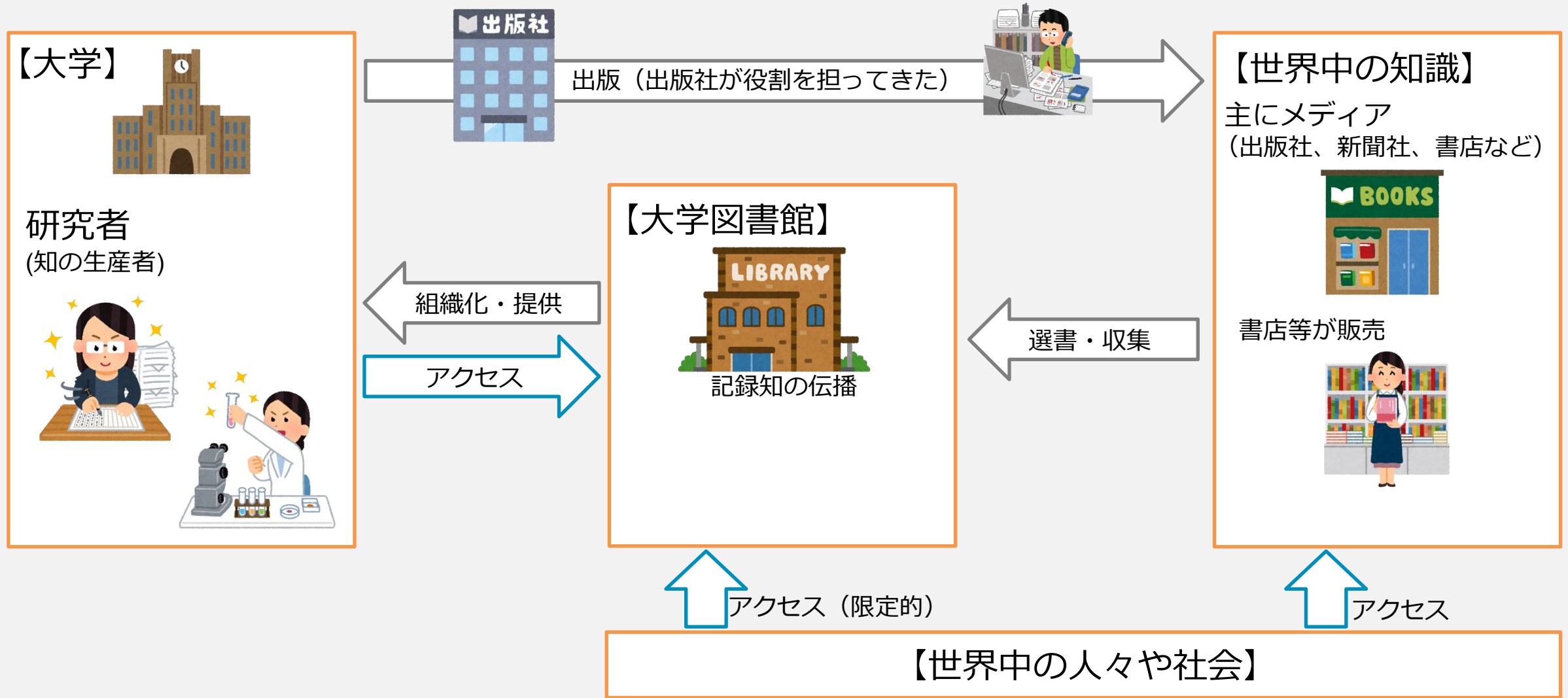
(「コンテンツのオープン化」の意義を考えるために)

「新しい知識創造」



- フローでぐるぐる回っている情報は、流れていくだけで深まらない
- 巨人の肩にのり、過去を循環させる仕組みの内挿を
- 新しい知識創造
 - アーカイビング = 記録知
 - ネットワーキング = 集合知両者が組み合わせられることで初めて新しい知が生み出される

「知の再生産システム」の中での大学図書館（過去：デジタル革命前）¹⁴

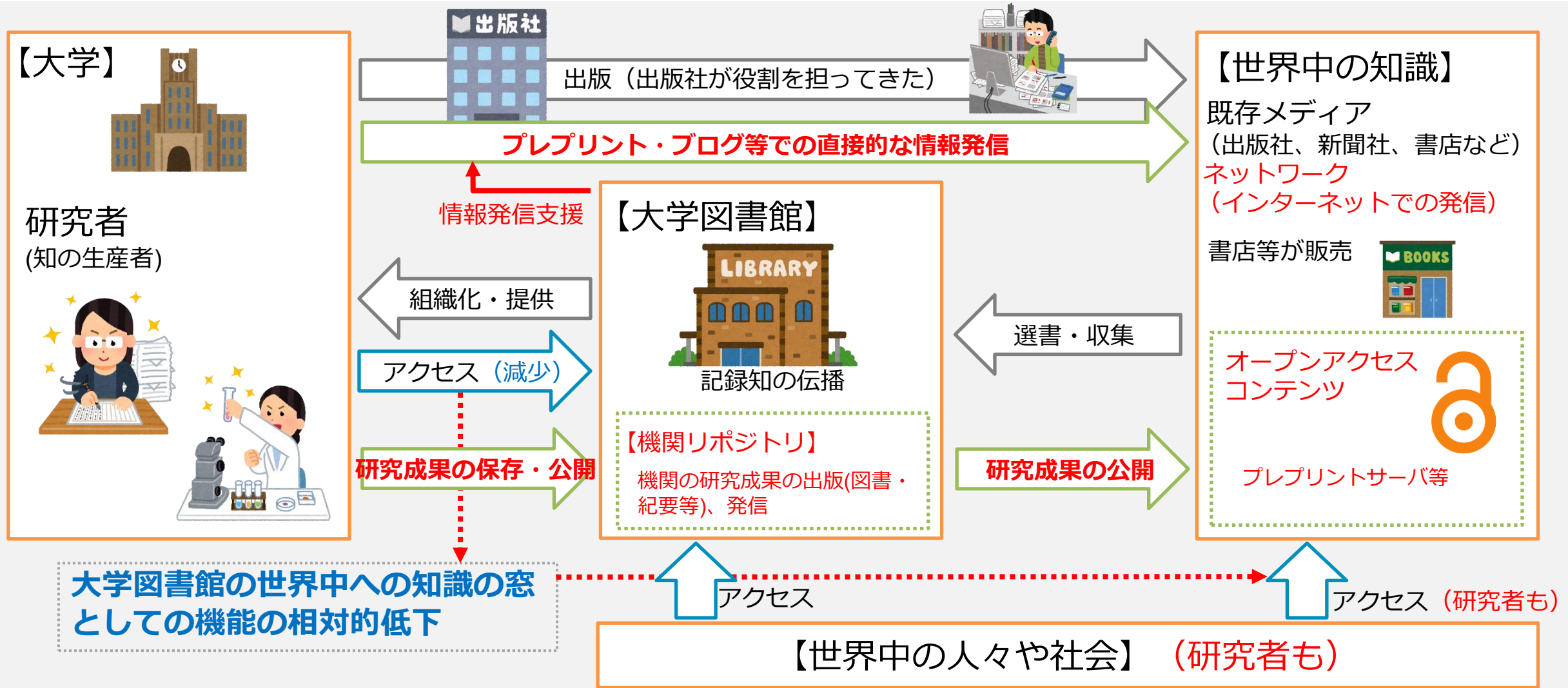


大学図書館は、主に大学構成員への世界中への知識の窓として機能してきた

「知の再生産システム」の中での大学図書館（過去：デジタル革命前）¹⁵



「知の再生産システム」の中での大学図書館（現在：デジタル革命後）¹⁶



機関リポジトリの意義と可能性

大学図書館は

「知が再生産されるようなシステムを維持するために存在する」

△ オープン化による図書館の中抜き（役割の相対的低下）

○ 「世界中への知識発信の窓」として無限大な貢献可能性

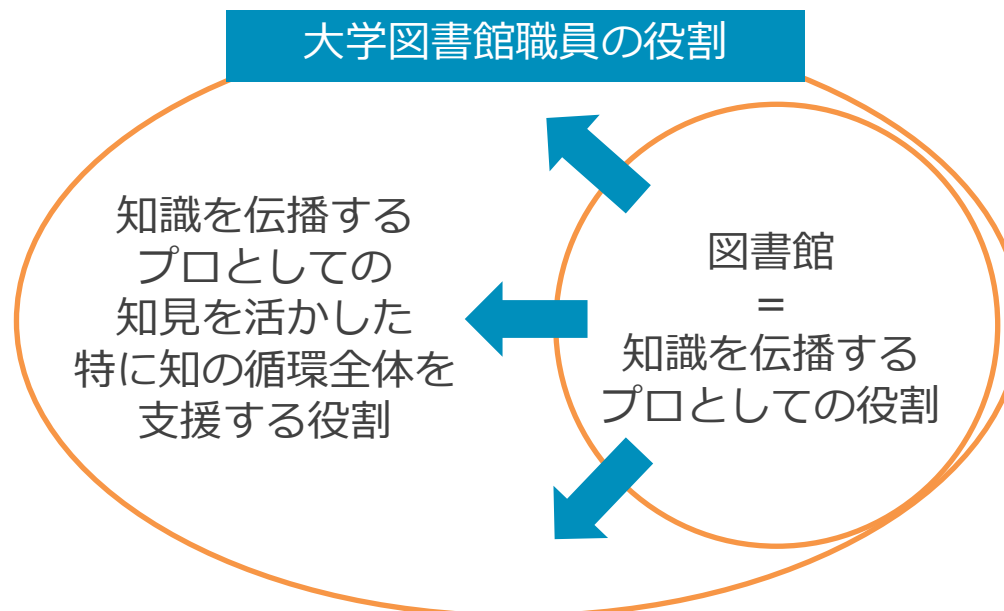
**昔も今も図書館は「知の再生産システム」において重要な役割
（知りたい人に、知りたい知識を届ける。その役割はむしろ増大している）**

デジタル化とオープン化が加速度的にすすんでいる今、
我々がさらに貢献する可能性が増大している。

**機関リポジトリは世界中への知識発信の窓として
「知の再生産システム」の重要な役割を担い、科学の発展に貢献**

個人的まとめ（2年前）

科学を発展させるための
大学の様々な取り組み



特にRead（知の共有）だけでなく、Publish（知の創造）にも支援し、知識の循環全体に貢献する。

オープンサイエンスの時代（知は書き手から受け手に直接的に伝播される）にはこれまでの知見を活かし知の創造の支援をも行っていくことが必要なのではないか。

知識の循環を支援するプロとして、知識を伝播するプロをベースとしつつ、もっと広い範囲で大学や科学の発展に貢献する。

図書館の「知の循環システム」への貢献

（これまで（も）） 知識を伝播する役割

私たちは世界中で協力して、1件1件目録を作成し、さらに利用者が使いやすいように棚に並べて、知りたい人が知りたいことにアクセスできるような環境を構築する仕事をしてきた。

（これから（も）） 知の循環全体を支援する役割

これからも同じで、オープンにしたい人がいたら、1件1件オープン化や研究成果発信の支援を行い、整理、流通させ、世界中の知りたい人が知りたいことにアクセスできるようにしていくことができる。これは**私たちの最も得意**とすることであり、かつ**私たちにしかできない**ことではないでしょうか。

私たち（図書館職員）ができること、役割

① 1件1件コツコツとオープンにする

私たちのできる範囲で、できる量をコツコツとオープンにしていくこと。

（特に世界中で私たちにしかオープンにできない、紀要や学位論文、そしていわゆるグリーンオープンアクセス学術雑誌論文）

② 流通にのせ世界中の人に届ける

加えて、オープンにした成果物を、きちんと世界中の人に届けるようにすること。

（メタデータ（書誌情報など）を整え、世界中の人がみつけやすいようにCiNiiで検索できるようにすることや、GoogleScholar等の交際的なデータベースで検索できるようにすること）

2

京都大学では何をしているの？

新しい知識創造のための「知識の循環」に向けて

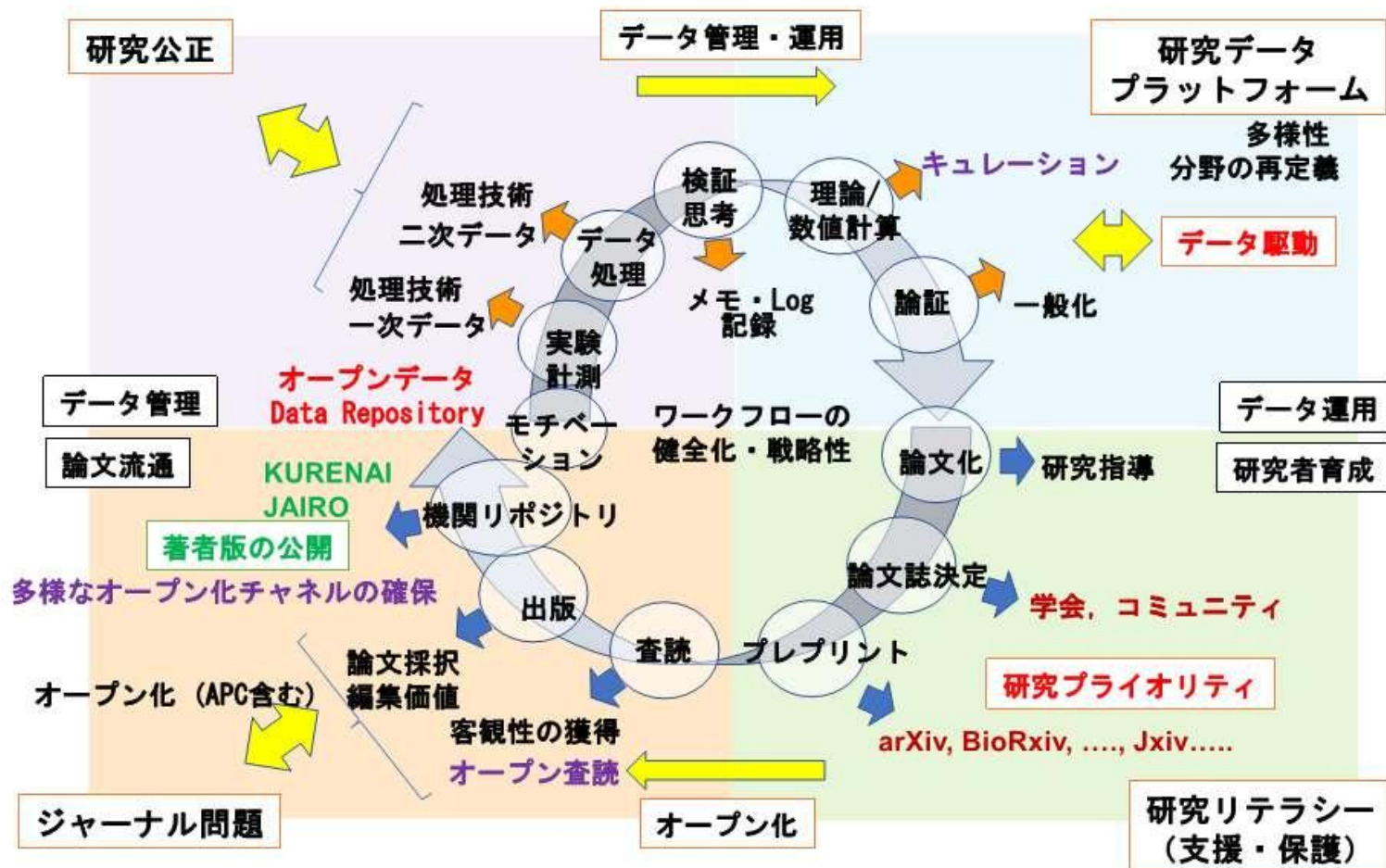
① 1件1件コツコツとオープンにする

② 流通にのせ世界中の人に届ける

- やることはシンプルだけど、「知識の循環」を意識していきたい。
- 科学は、巨人の肩にのりながら、スパイラル上に知識が循環しながら発展していく。
- そのためには、研究成果である論文やその根拠データがオープンであることは大事なこと
- 「知識の循環」へ貢献するためには、**研究のライフサイクル全体を把握しながら、適切な支援**を行っていきたい。

大学における研究のライフサイクル

大学における研究のライフサイクル



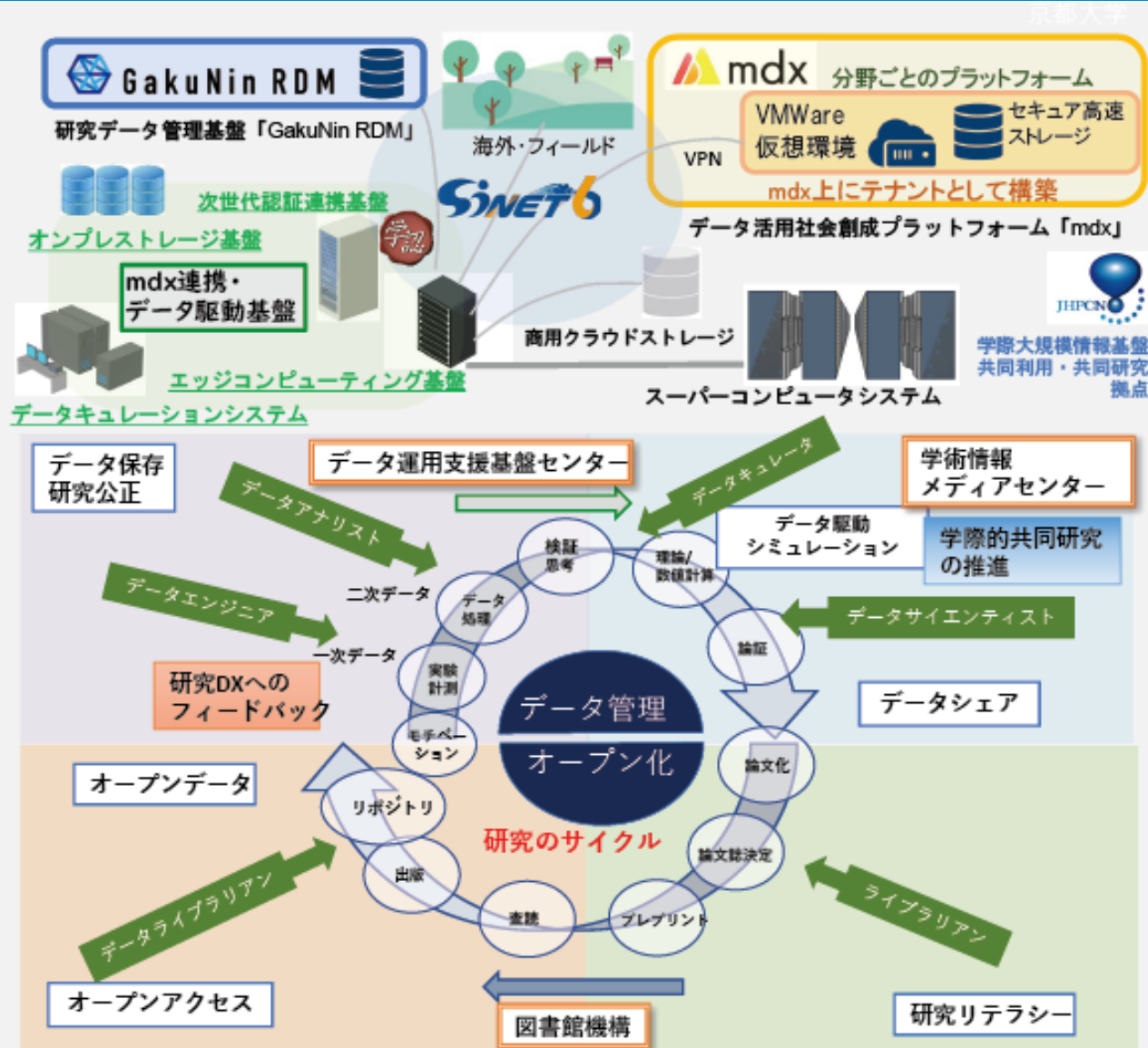
それぞれのフェーズにおいて、大学でも様々な支援を行ってきた

ただし...

組織支援における、現状の問題認識

多くの大学では研究サイクルの支援及び事務処理が別の部署や研究科等で連携なく個別になされ、それに慣れた研究者がその求めの必要性を自らの業務として不要なものとする危険性がある。研究公正などの確認は研究のサイクルの中で行われれば苦もない話であるが、別の部署がその業務として研究の流れと関係なくエビデンスを求めてくることは、研究者からしてみれば煩わしいだけである。それと同様に、流れを知らずに公開を義務化する要請を大学が研究者に出すことは同様に想像できる。これは、大学という本来研究者を守るべき組織の中で生じる業務の局所最適化の弊害で、本来の研究組織の在り方も含めて設計する必要がある。

「データ運用支援基盤センター」の設置



京都大学情報環境機構
データ運用支援基盤センター
(2024年1月設置)

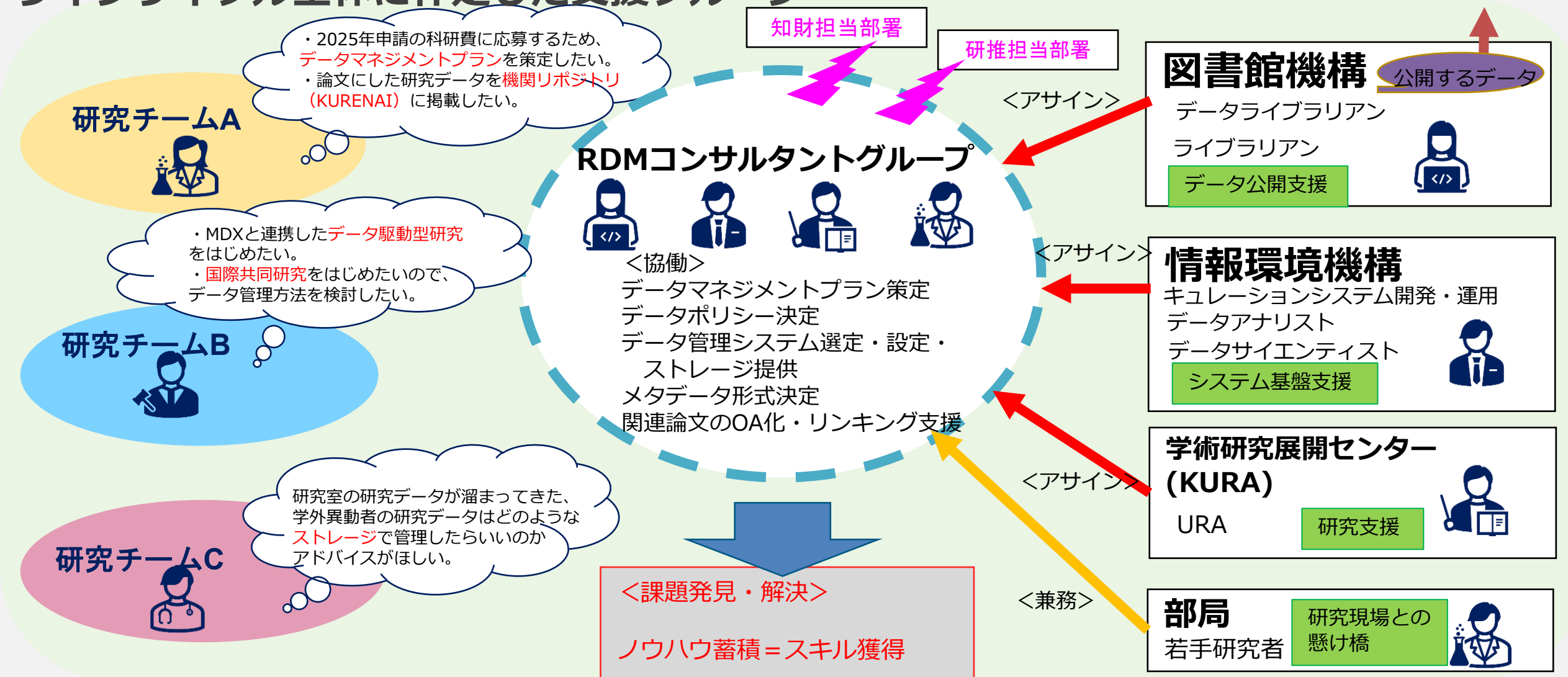
局所でバラバラな支援ではなく、
研究のライフサイクル全体に伴走
した支援を行う



センター内に「[RDMコンサルタントグループ](#)」を設置

RDMコンサルタントグループ

データ運用支援基盤センターに設置された、研究チーム毎への研究のライフサイクル全体に伴走した支援グループ



研究チーム毎への研究のライフサイクル全体に伴走した支援グループ

- 局所ごとの支援だけではなく、研究の計画から、成果公開まで
 - 図書館機構でも、直接的には研究成果の「公開」への支援を行うが、**研究の計画当初から、公開を見据えたアドバイスや案内、支援を行っていき**たい。
- （例えば、アンケートを実施する計画などの場合は、最終的にその成果論文やデータの公開を見据えた計画（DMPだけではなく）が必要であるし、おそらくスムーズであろう。）

研究者からの問い合わせに見る研究データ管理(RDM)の課題

京都大学RDMコンサルタントグループにおける取り組み

小沢 英道¹, 渡瀬 紀子², 中野 貴典³, 西岡 孝文⁴, 竹渡 昌樹⁵, 又野 保美子⁶, 神崎 清志子⁷, 宮田 保美子⁸, 奥田 敬子⁹
¹京都大学 情報学研究所 ²京都大学 総合情報学研究所 ³京都大学 情報学研究所 ⁴京都大学 情報学研究所 ⁵京都大学 情報学研究所 ⁶京都大学 情報学研究所 ⁷京都大学 情報学研究所 ⁸京都大学 情報学研究所 ⁹京都大学 情報学研究所

1. はじめに：RDMの実践に伴う負担

研究データ管理(RDM)は、研究データの適切な管理・活用を可能にするための取り組みである。

研究データ管理(RDM)の実践に伴う負担は、研究者にとって大きな課題となっている。

研究データ管理(RDM)の実践に伴う負担は、研究者にとって大きな課題となっている。

研究データ管理(RDM)の実践に伴う負担は、研究者にとって大きな課題となっている。

2. RDMコンサルタントグループ

RDMコンサルタントグループは、研究者からの問い合わせに対応するための取り組みである。

RDMコンサルタントグループは、研究者からの問い合わせに対応するための取り組みである。

RDMコンサルタントグループは、研究者からの問い合わせに対応するための取り組みである。

3. RDMに関する問い合わせ対応

2024年5月から2025年9月までに14件の問い合わせがあった。

2024年5月から2025年9月までに14件の問い合わせがあった。

2024年5月から2025年9月までに14件の問い合わせがあった。

3.1 問い合わせの傾向

問い合わせの傾向は、研究者の所属や研究分野によって異なる。

問い合わせの傾向は、研究者の所属や研究分野によって異なる。

問い合わせの傾向は、研究者の所属や研究分野によって異なる。

3.2 問い合わせの傾向

問い合わせの傾向は、研究者の所属や研究分野によって異なる。

問い合わせの傾向は、研究者の所属や研究分野によって異なる。

問い合わせの傾向は、研究者の所属や研究分野によって異なる。

4. 研究データ管理・公開セミナー

研究データ管理・公開セミナーは、研究者に対する教育・啓蒙のための取り組みである。

研究データ管理・公開セミナーは、研究者に対する教育・啓蒙のための取り組みである。

研究データ管理・公開セミナーは、研究者に対する教育・啓蒙のための取り組みである。

5. 今後のRDM支援体制の課題と展望

今後のRDM支援体制の課題と展望は、研究者のニーズや研究分野の発展によって変化する。

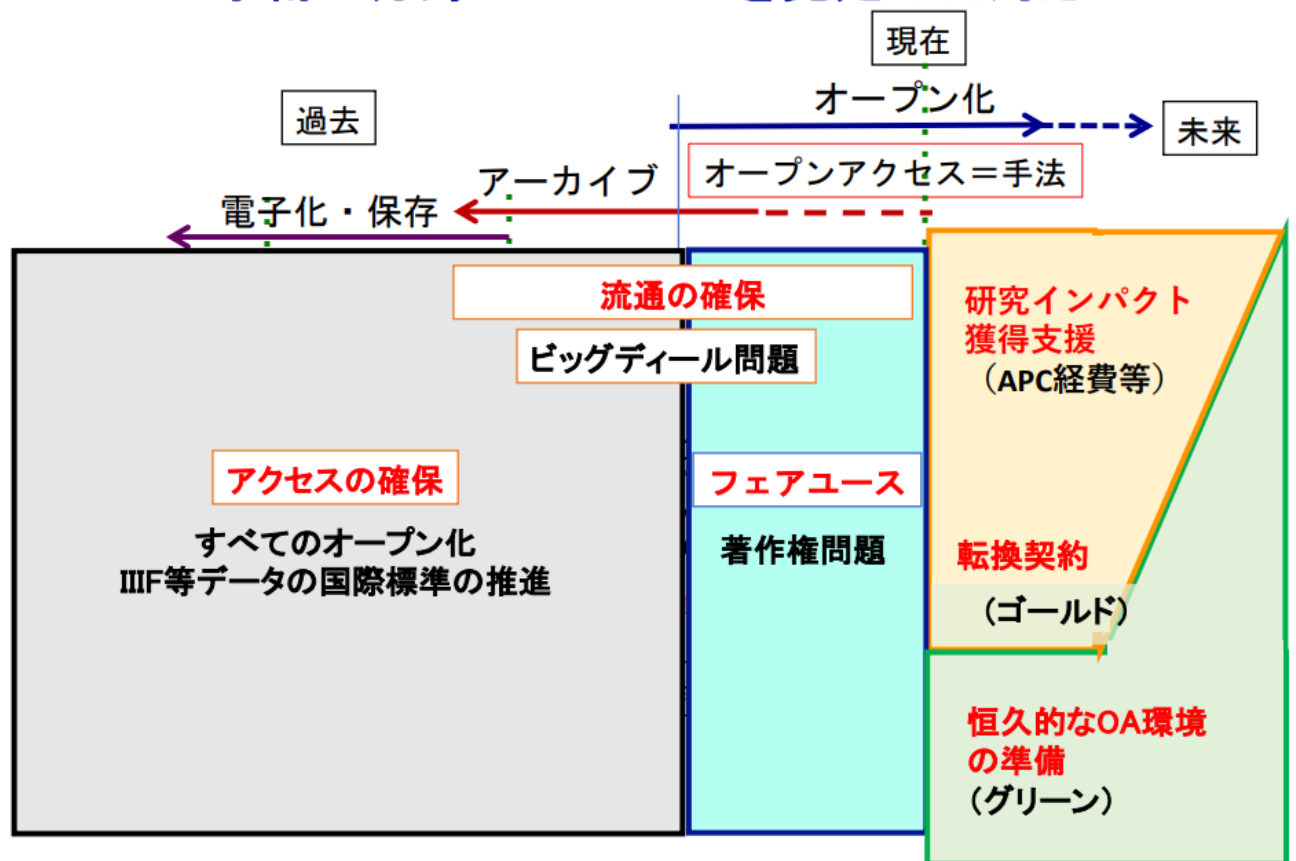
今後のRDM支援体制の課題と展望は、研究者のニーズや研究分野の発展によって変化する。

今後のRDM支援体制の課題と展望は、研究者のニーズや研究分野の発展によって変化する。

図書館機構の事例や構想

「① 1件1件コツコツとオープンにする」「② 流通にのせ世界中の人に届ける」を基本とした京都大学図書館機構での取り組み事例や構想

学術の分野・フェーズを見定めた対応



主に以下2サービスで展開中

京都大学学術情報リポジトリ
(オープン化のプラットフォーム)

京都大学学術情報リポジトリ
KURENAI 紅
Kyoto University Research Information Repository

京都大学貴重資料アーカイブ
(アーカイブのプラットフォーム)

京都大学貴重資料
Digital Archive

←引原隆士. (2024). 研究データのオープンアクセスを担保する機関リポジトリの展開. STI Horizon, 10(2). より

「1件1件コツコツとオープンにする」

①オープンアクセスや研究データ管理・公開のポリシー

京都大学オープンアクセス方針（2015年）

【抜粋】

2. 京都大学は、出版社、学会、学内部局等が発行した学術雑誌（図書等を除く）に掲載された教員の研究成果（以下「研究成果」という。）を、京都大学学術情報リポジトリ（以下「リポジトリ」という。）によって公開する。

京都大学研究データ管理・公開ポリシー（2020年）

【抜粋】

4. 京都大学は、研究データが、論文などと同様に、今後の学術や社会の発展に貢献する知の基盤の一つであるとの認識に基づき、特段の定めがある場合を除き、可能な限り社会に公開し、その利活用を促進する。

5. 京都大学は、研究データ管理および公開を支援する環境を整える責務がある。

- 研究インパクト獲得支援（APC経費等）や転換契約によるオープン化については、「恒久的なOA環境の準備」（京都大学オープンアクセス方針＝国のOA基本方針）を主方針としつつ、大学と研究者双方にメリットがある場合のみ、一部の転換契約を導入（ゴールドOAかグリーンOAかは研究者の自由な選択による）

「1件1件コツコツとオープンにする」

②KURENAIによるオープン化



- KURENAIによるオープン化（主なコンテンツ）
 - 学術雑誌論文：46,373件(2025年度：2,207件)
 - 紀要論文：129,259件(2025年度：1,133件)
 - 学位論文：31,709件(2025年度：649件)
 - 研究データ：338件(2025年度：26件)
- オープン化作業における、学内図書館・室（40程度）の職員協働体制の構築を開始

【オープンサイエンス推進連絡会】

図書館機構将来構想「基本目標1 オープンアクセスを推進し、研究活動を支援する」を実現するため、全学図書館機能を担う附属図書館及び桂図書館、専門図書館である部局図書館室等とにより綿密な協働を行い、オープンサイエンスを推進する活動を行う。

- 「京都大学図書館機構将来構想2020-2027」では1丁目1番地にオープンアクセス推進

京都大学図書館機構 将来構想 2020-2027

世界最高水準の研究教育施設を築く
新たな図書館機能の实现

【図書館機構の基本目標】

基本目標1
オープンアクセスを推進し、研究活動を支援する

「1件1件コツコツとオープンにする」 ②KURENAIによるオープン化

What is **紅** KURENAI

より親しみやすいリポジトリへ
To be a friendly repository for users

研究成果のオープンアクセスが義務化
Open access to research outputs has become mandatory.

2025年度から、競争的研究費を受給する研究者は
研究成果の学術論文・根拠データを機関リポジトリで公開
From 2025 financial year, researchers who receive competitive research funds should make the outputs (i.e., journal articles and research data) accessible on an institutional repository.

オープンアクセス方針にしたがって、**KURENAI**に
研究データを登録・公開可能なシステムを導入した
In accordance with the open access policy, a system was introduced to
KURENAI that allows research data to be registered and made public.

KURENAIの使いやすさと認知度を向上させ、
利用者にとって親しみやすいリポジトリを目指した
We aim to make KURENAI a friendly repository by improving the user-interfaces and awareness of it.

KURENAIのトップ画面をリニューアル
Renewal of KURENAI Top Page

KURENAI 公開支援システムへの
アクセスリンクの設置
Installed the URL to KURENAI Deposit System for convenient navigation.

KURENAI のブランドをアピール
Renewed the website design for the brand appeal of KURENAI.

アイコンを活用し、コンテンツの
イメージが視覚的に伝わりやすく
Adopting content icons to improve the visibility.

検索機能を設置
必要な情報にアクセス
Installed a search bar to make the archives more accessible.

KURENAIと
オープンアクセス方針の広報活動
PR activity of KURENAI and Open Access Policy

より身近に
More familiar

使いやすく
More useful

見やすく
More simple

KURENAI 公開支援システムを使い方
How to use KURENAI Deposit System

KURENAI 利用状況の変化
Changes in KURENAI usage

〇研究データの登録件数
Inquiries of research data registration have been increasing because of the renewal of websites and PR activity.

〇研究データの公開ページ
Inquiries of research data registration have been increasing because of the renewal of websites and PR activity.

〇これまで登録された研究データ拡張子
List of research data extensions registered so far.

〇OA・OS、KURENAIの利用方法に関する動画配信
Online Videos About Open Access and Open Science, and how to use KURENAI.

お問い合わせ
京都大学図書館情報 研究支援第三部
repository@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp

NEWS from the Kyoto University Library Network
アーベル賞を受賞された船岡正樹 数理解析研究所特任教授
高等研究奨励特定教授の関連論文等のリンク集を公開しました。

【学内研究者への広報】

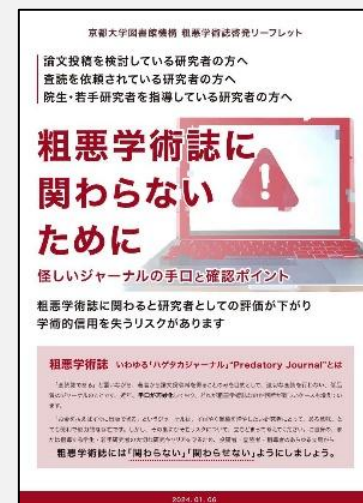
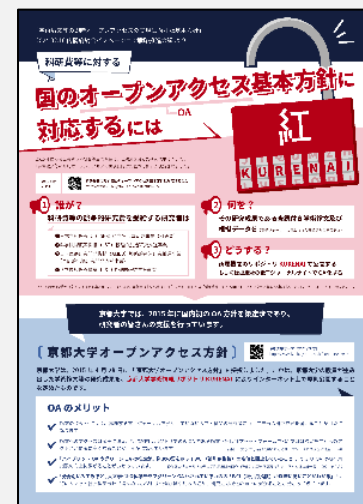
- オープンサイエンス啓
発ショート動画シリーズ作成



- 各種パンフレットの作成

【出版支援】

- 粗悪学術誌についての
問い合わせ・情報提供



「1件1件コツコツとオープンにする」 ②KURENAIによるオープン化

【KURENAIのアピール】

- 各種特設サイトなども

The image displays two screenshots of the KURENAI website. The left screenshot shows a featured article titled 'ノーベル化学賞を受賞された北川進 理事・副学長、高等研究院特別教授の関連論文等のリンク集を公開しました' (Link collection of related papers of Susumu Kitagawa, President/Vice President, and Special Professor of the Institute for Advanced Study, who won the Nobel Prize in Chemistry). The right screenshot shows another featured article titled 'ノーベル生理学・医学賞を受賞された坂口志文 名誉教授の関連論文等のリンク集を公開しました' (Link collection of related papers of Shigetada Saito, Honorary Professor, who won the Nobel Prize in Physiology or Medicine). Both pages include a 'Key Publications' section with links to specific research papers.

【学内研究者によるオープン化の負担軽減】

- 「KURENAI公開支援システム」の運用



KURENAIによる 研究データの公開について

京都大学附属図書館
研究支援課

KYOTO UNIVERSITY

＼ KURENAIで公開！ ／

論文

DOIから論文情報を補完して新規に登録するには

＼ KURENAIで公開！ ／

研究データ

公開前に査読者とのみ研究データを共有するには

＼ KURENAIで公開！ ／

学会発表資料、
教材、図書など

↑「KURENAI公開支援システム」使い方動画なども作成

「1件1件コツコツとオープンにする」

③貴重資料デジタルアーカイブによるアーカイブ

京都大学
Kyoto University

日本語 English

京都大学貴重資料デジタルアーカイブ

コレクション 検索 お知らせ サイトについて 京都大学図書館機構

肥後国海中の怪、アマビエの画像をご利用いただく際には
肥後国海中の怪、アマビエの画像をたくさんの方々にご利用いただき、ありがとうございます。オープンアクセスデータは、誰もが自由に使うことのできる大切な共有財産です。ご利用の際に知っておいていただきたいことをまとめましたので、データを使う人、制作物を見る人、皆が気持ちよく利用できるように、ご協力をお願いいたします。
● 説明サイトを見る

貴重資料デジタル化プロジェクトへのご支援を募集します
京都大学が所蔵する貴重な古典籍資料のデジタル化・公開を進めるため、「京都大学貴重資料デジタルアーカイブ基金」を設置しました。詳細はこちらをご覧ください。

画像を自由に二次利用できる資料所蔵図書館・室を拡大しました
インターネット上で公開している京都大学附属図書館、吉田南総合図書館、法学部図書室、経済学研究科・経済学部図書室、理学研究科各図書室及び理学部中央図書室、基礎物理学研究所、総合博物館所蔵資料の電子化画像は、利用申請・利用料の支払手続きをすることなく、自由に利用することができます。詳細は「コンテンツの二次利用について」をご覧ください。

お知らせ

■ 2025-10-07 京都大学アカデミックデイ2025に参加しました
■ 2025-09-22 京都大学アカデミックデイ2025に参加します (9/27)
■ 2025-04-24 利用報告のためのフォームを設置しました
■ 2025-03-27 総合博物館が所蔵する「教王護国寺文書」より310点を公開しました
■ 2025-03-27 画像の不具合について

● すべてのお知らせを見る

ピックアップ

国宝・今昔物語集 (鈴鹿本)

重要文化財

時代の記録

彩りの挿絵

地図でみる日本、世界

京都大学所蔵資料でみる博物学の時代

京都大学所蔵資料でたどる文学史年表

【学内者対象】公開したい画像をお持ちの方へ

展示会・企画展・研究成果

- 貴重資料デジタルアーカイブによるアーカイブ公開
 - 図書館・室所蔵の古典籍を中心としたアーカイブと公開
 - 25,905 タイトル
 - 2,155,567 画像
- 国宝・重要文化財等含む
- 図書館・室所蔵のコレクションだけではなく、学内の様々な学部、研究科、研究所等で所蔵しているデジタルコレクションのポータルサイト、公開場所となることも検討中
- くずし字へのOCR処理による本文テキストデータ提供も開始予定

「1件1件コツコツとオープンにする」

③学術書のオープン化

- 2007年度から、京都大学学術出版会と連携し、京都大学学術出版会から刊行している研究所をデジタル化、KURENAIで公開（京都大学学術出版会が発行する研究書の中から著者及び出版会の意向と協議の上決定）
- さらに、新たな研究者の成果公開支援の試みとして、図書館によるオープンアクセス出版を検討している。特に商業ベースになりにくい学術書の出版、公開支援が行えないかの検討を開始している。

CA Current Awareness Portal
図書館に関する情報ポータル

図書館界、図書館情報

CA-R カレントアウェアネス-R CA-E カレントアウェアネス-E CA カレントアウェアネス

ホーム > カレントアウェアネス-R

京都大学附属図書館と京都大学学術出版会、リポジトリでの研究書公開に合意

© 2008年02月04日

京都大学附属図書館と京都大学学術出版会が2008年2月1日、京都大学学術出版会が刊行している研究書をデジタル化し、京都大学附属図書館の機関リポジトリ「京都大学学術情報リポジトリ」に登録し無料公開することに合意したと発表しました。

京都大学学術情報リポジトリと京都大学学術出版会との連携について - 京都大学図書館機構
<http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/modules/bulletin/article.php?storyid=248>

京都大学学術出版会
<http://www.kyoto-up.or.jp/>
京都大学学術情報リポジトリ
<http://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/>

「流通にのせ世界中の人に届ける」

① KURENAIコンテンツを多様なデータベースに採録してもらおう

- IRDBだけでなく、多様なデータベースから採録されるよう積極的に
- IRDB担当が頑張ってくれており、CiNii等多様なデータベースにデータを提供ないし、採録される仕組みを構築してくれているが、全体最適化による限界もある。
- 京大では現在IRDB以外でも、Google Scholar, PubMed, OpenAlex(Unpaywall含む)などを重要視して採録されるよう頑張っている
- Google Scholar
 - リポジトリからSitemapを出力し、採録の対象にしてもらおう
 - KURENAI：現在約160,000件採録
- PubMed
 - PubMedに連絡、登録し、必要なデータを送付する
 - 「LinkOut」機能からリポジトリにアクセスできるようになる
 - KURENAI：現在約12,000件採録
- OpenAlex
 - Unpaywallの登録フォームから必要な情報を登録する。
 - KURENAI：現在約70,000件採録



話者「[一介の機関リポジトリ担当者が考えるOpenAlex & Unpaywall への期待と貢献可能性:私たちができるオープンアクセスへの貢献とは](#)」

ScholAgora第10回セミナー ワークショップ「OpenAlexを使う」令和7年9月9日(火) で詳しく京大の取り組みを紹介しています。

②その他

- 学内発行学術誌・紀要に原則DOIを付与するルールに変更
 - KURENAIでは現在約160誌（現在でも発行しているカレント誌）をホスト
- 学内発行学術誌・紀要は、JaLC DOIではなく、Crossref DOIを付与するルールに変更(2026.4より開始予定)
 - DOI付与はリンク解決だけでなく、世界中に書誌データを流通する役割も
 - 国際流通性の向上（各出版社やデータベース（OpenAlex等）にメタデータ（主に書誌情報）が採録されやすいだろう）という理由から
- 貴重資料デジタルアーカイブについても、書誌単位にJaLC DOIを付与することを計画中

3

コミュニティで力をあわせて！

JPCOARコミュニティの紹介と機関リポジトリのやること整理

+αでご依頼いただいたもの（再）

【+αの主催者様からのご依頼内容】

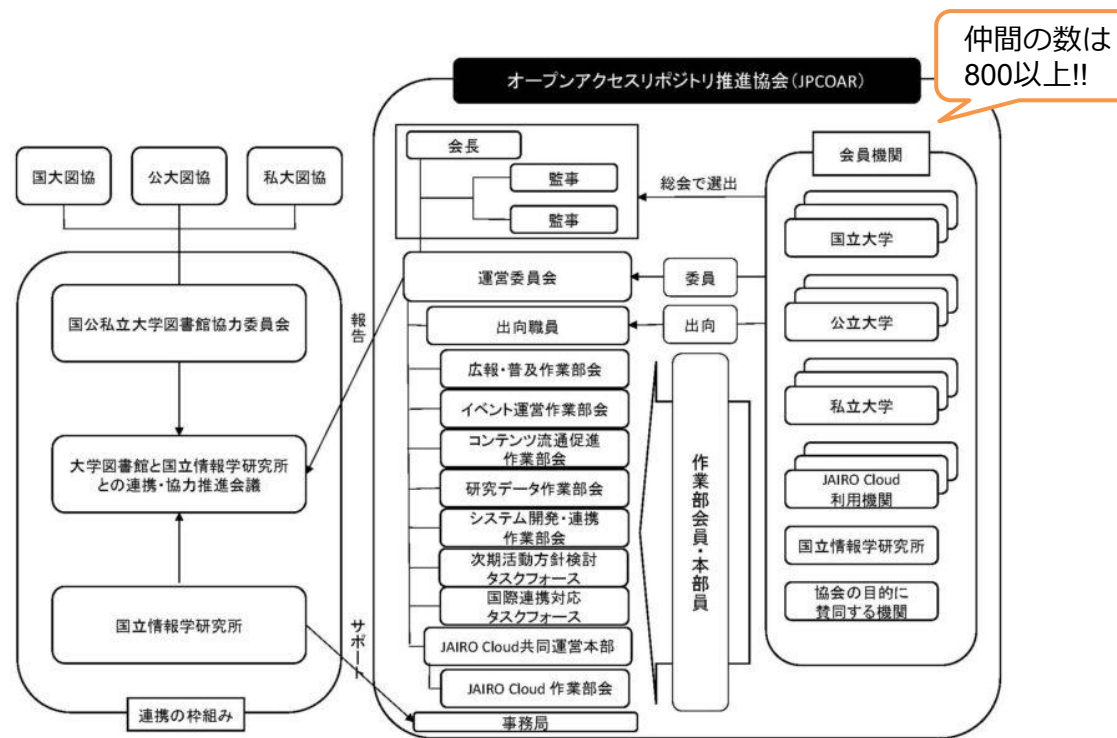
機関リポジトリでの登録・公開について、「何から手をつければよいか」と課題を感じている大学職員の方が多いかと存じます。つきましては、研究者を支えるお立場でのご経験に基づき、「具体的にどう進めればよいか」をお話しいただけますでしょうか。また、この中で JPCOAR にて実施されているコミュニティ醸成活動についても情報提供いただけますと幸いです。

「JPCOARコミュニティの紹介と機関リポジトリのやること整理」の前提として

- オープン化は、世界中での地道な 1 件 1 件の積み上げが大事である。
- 大学・機関によっては、毎日発生する業務ではないにも関わらず、新しい業務でもあるし覚えることがたくさん。例えばエフォートとしては3%くらいなどの大学・機関もたくさんあると思います。（京都大学の事例を紹介しましたが、各大学・機関で目的が違うので。（京都大学基本理念「世界的に卓越した知の創造を行う」））
- 全世界での効率化検討も大事だけど、現時点ではそうもなっておらず、特に現状では大学や機関での現場同志の助け合いが重要だと思っています。
- 図書館は昔から横の繋がりは強いはず

JPCOARは会員機関同士が助け合えるコミュニティ

オープンアクセスリポジトリ推進協会（JPCOAR）は、機関リポジトリを運営する会員機関が相互に情報とノウハウを共有するためのコミュニティ

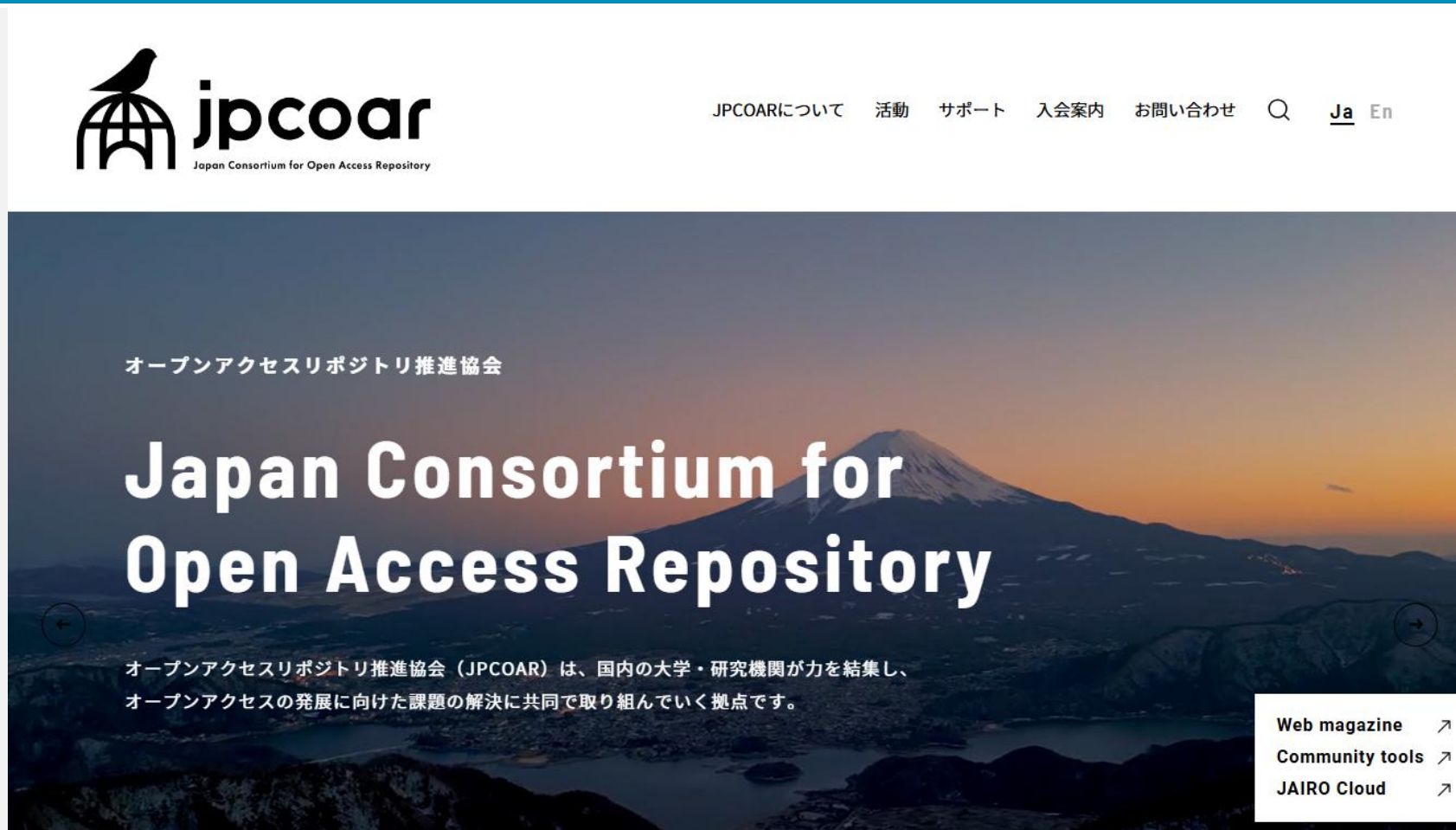


JPCOAR組織図 <https://jpcoar.org/aboutjpcoar/organization/>



会員機関は、教材や説明会を自機関のリポジトリの運営に役立てると同時に、他の機関へのアドバイスや事例の共有を通して、当事者としてコミュニティの運営に携わっています

JPCOARウェブサイト



今年度7月に
リニューアルオープン

様々なコミュニケーションツールの提供や、研修・イベントのアーカイブ、業務に役立つ教材や情報などを、各作業部会で頑張って構築中

コミュニティへの参加

【2】 交流 - JPCOAR Community Slack

<https://jpcoar.org/support/communitytools/jpcoar-community-slack/>



- JPCOAR会員機関、特に**実務担当者間の情報共有・相互協力のためのツール**です。
- 利用にはJPCOAR Webサイト（上記URL）から参加申請が必要です。
- **以下のようなチャンネルで情報交換・相談・お困りごとの投稿…ができます。**

◎all-jpcoarcommunity

情報交換、質問、自慢、宣伝等、多様な目的でお使いください。

◎all-リポジトリ初心者相談室

どんな初心者の質問をしても恥ずかしくない！ことを目的としたチャンネルです。
回答できる質問などが投稿されたら、ぜひみんなで助け合いましょう。

◎jairo_cloud

任意参加のチャンネルです。
JAIRO Cloudに関する情報共有のためのチャンネルです。

9

「JPCOAR 地域ワークショップ資料」より

コミュニティへの参加方法はさまざま

- 作業部会に入る（ハードル高い）
- メーリングリストで相談（ちょっとハードル高い？）
- Slackの初心者相談室で相談（気軽だけどまだハードルが？）
- Slackの投稿にアクションする（このあたりからでも！）
- 参加したイベントや研修、各種アンケートに答える（このあたりからでも！）

「Slackの投稿にアクションしてもらおう」「アンケートに回答してもらおう」だけでも立派な参加ですし、また作業部会等にも励みになりますし、運営の助けにもなります！

「機関リポジトリやること整理」

特に「国のオープンアクセス基本方針（※）」に着目して、機関リポジトリのやることを整理してみます。

研究DX 内閣府



[内閣府「研究DX（デジタル・トランスフォーメーション）－オープンサイエンス：学術論文等のオープンアクセス化の推進、公的資金による研究データの管理・利活用など－」](#)（最低限見るとよいものを時系列順にした。）

- 公的資金による学術論文等のオープンアクセスの実現に向けた基本的な考え方（令和5年10月 総合科学技術・イノベーション会議 有識者議員）
↓
- （※）学術論文等の即時オープンアクセスの実現に向けた基本方針（令和6年2月 統合イノベーション戦略推進会議決定）
↓
- 学術論文等の即時オープンアクセスの実現に向けた基本方針の実施にあたっての具体的方策（令和6年10月 改正 関係府省申合せ）

（話者によるまとめ）

「国のOA基本方針」には何が書いてあるのか？

研究者に求められていることは、

- 研究成果である学術論文と根拠データを所属機関のリポジトリで公開し、誰もが自由に利活用可能となるように

大学図書館に求められていることは、

- 機関リポジトリの価値向上、成果発信力の強化
- 研究者の研究成果公開・発信のサポートを機関リポジトリを通じて行う

私たちが為すべきこと（まずは）

- 機関リポジトリの価値向上、成果発信力の強化
 - 研究者の研究成果公開・発信のサポートを機関リポジトリを通じて行う
- を実現するための研究者支援への最初のステップ（最低限の準備）は主に以下4点

① 「国のOA基本方針」の理解

① 機関リポジトリの構築

② リポジトリの運用指針作成などの運用整備

③ 雑誌発表論文の登録に関する知識

- 特に雑誌発表論文における著作権ポリシーの理解

④ メタデータ流通の知識

リポジトリ運用準備



実務者の知識準備

① 機関リポジトリの構築

- 様々なリポジトリ用のソフトウェアがある（例：京都大学はDSpaceというソフトウェア）
- 基本機能のみの運用でよければJAIRO Cloudがベストチョイスか

以下JPCOREウェブサイトより

「JAIRO Cloudを利用することにより、個々の機関は低コストで効率的に機関リポジトリを導入・運用することができます。また、JPCOAR内での情報共有により各機関の担当者の作業負担が軽減されるほか、JAIRO Cloudの機能改善等にも参画できます。」

②リポジトリの運用指針作成などの運用整備

【チェックポイント】

- 運用指針等で「学術雑誌論文」や「根拠データ」をリポジトリに登録できるルールになっているか？
- JAIRO Cloud（リポジトリシステム）で、「学術雑誌論文」や「根拠データ」が登録できるディレクトリなどが用意されているか？

【以下話者私見補足：ポリシーについて】

- OAポリシー、研究データ管理・公開ポリシーの策定必要有無は機関の考え次第でよいと思う。
- 機関としてのスタンスを内外に示す必要がある場合はあったほうがよいとも思うが、今回国のOA基本方針が定められ、論文やその根拠データについて国レベルで義務化された。これ以上の意味を各機関でどれくらい位置付けるかによるのではないか。
- 特に研究データは、多種多様であり、かつ研究インテグリティ、倫理等とも密接に関わるため、図書館だけでは管理も含めた全体は担当できない。図書館は、その役割である「知の再生産システム」部分（公開部分）に注力するのがよいのではないか。

③ 雑誌発表論文の登録に関する知識

基本的には登録必要性が出てきたときに慌てず対応できるよう手順を知っておけばよい。（詳細な知識は必要なし）

- 著作権ポリシーの調べ方をなんとなくでもよいので把握しておく。（実際には登録の必要性が出てきたときに調べられればよい）
- メタデータ入力はやりながら慣れる程度でOK（図書の日録よりは単純ですし、ルールも緩やかです）
- 研究データ（おそらく現状まだ少ない）は、もし必要になった段階で「研究データ登録ガイドライン」を参考に

④ メタデータ流通の知識

これは思ったより？重要です

- 義務化要件を満たす意味でも、世界中の読者に研究者の成果を届けるためにも重要。（「知の再生産システム」のためにも）
- まずはIRDBにハーベストされる（= CiNiiに採録される）ことのみ考えればよいと思います。
- ただし、最初の（JAIRO Cloud等のリポジトリの）設定だけきちんとできれば、日常的な手間は発生しない。
- 最初に頑張って設定しよう！

②リポジトリの運用指針作成などの運用整備

- [京都大学学術情報リポジトリ運用指針](#)
”本学において作成された次の各号に掲げる研究・教育成果物とする。”
（細かく種別を記載（学術論文、学位論文、etc...））
- [群馬大学リポジトリ運用指針](#)
”本学に関わる教育・研究成果物で，登録資格者が単独または他と共同で作成したもの，または本学においてその主要な部分が作成されたもの。”
（大枠で定めている。このような方法でもOKかと）

③ 雑誌発表論文の登録に関する知識

- （まずは）著作権ポリシー調査
 - [「即時オープンアクセスに備える」シリーズセミナー その1 学術雑誌論文の権利確認方法って？①よくあるパターン講義編（会員機関限定）](#)
- （必要がでてきたら）研究データの登録
 - [機関リポジトリへの研究データ登録ガイドライン](#)

④ メタデータ流通の知識

- [IRDBの概要と内部実装（第4回JPCOAR Webinar「IRDB-カラクリと役割：どこから・どこへ・どのように」）](#)

私たちができること、役割（再）

- ① **1件1件コツコツとオープンにする**
- ② **流通にのせ世界中の人に届ける**

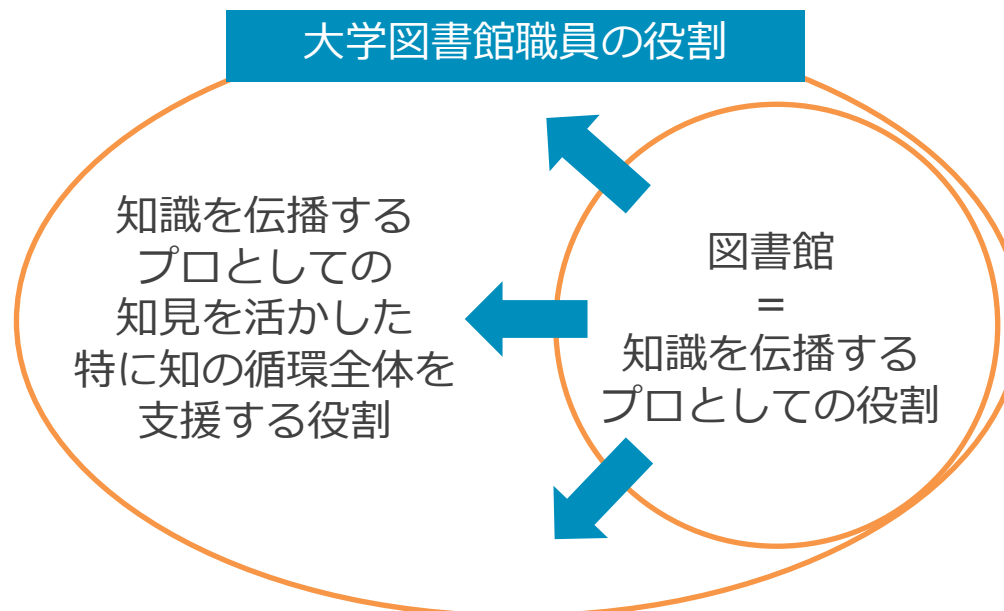
- オープン化することの意味自体は研究者コミュニティ自身考えること。
- 私たちの仕事は、オープン化したい研究者に答えるための基盤を整えておくこと
- 実際に希望があった際には、1件オープンにするだけでも、世界に貢献することになる！

4

まとめ

個人的まとめ（2年前）（再）

科学を発展させるための
大学の様々な取り組み



特にRead（知の共有）だけでなく、Publish（知の創造）にも支援し、知識の循環全体に貢献する。

オープンサイエンスの時代（知は書き手から受け手に直接的に伝播される）にはこれまでの知見を活かし知の創造の支援をも行っていくことが必要なのではないか。

知識の循環を支援するプロとして、知識を伝播するプロをベースとしつつ、もっと広い範囲で大学や科学の発展に貢献する。

「知の循環システム」への貢献（再）

（これまで（も）） 知識を伝播する役割

私たちは世界中で協力して、1件1件目録を作成し、さらに利用者が使いやすいように棚に並べて、知りたい人が知りたいことにアクセスできるような環境を構築する仕事をしてきた。

（これから（も）） 知の循環全体を支援する役割

これからも同じで、オープンにしたい人がいたら、1件1件オープン化や研究成果発信の支援を行い、整理、流通させ、世界中の知りたい人が知りたいことにアクセスできるようにしていくことができる。これは**私たちの最も得意**とすることであり、かつ**私たちにしかできない**ことではないでしょうか。

大学図書館は「知の再生産システム」に貢献してきた。デジタル化、オープン化により世界が変わろうと、「知の再生産システム」は必要である。私たちは変わらずそれに貢献できるはずであり、過去の蓄積からも誰よりもそれができるはず。
私たちは戦争、貧困などの課題を解決するための基盤を構築し、世界を幸せにできる！

（さらに一図書館職員として話者個人的感想）

「知の再生産システム」の中で、どこまで貢献できるのかは正直自分でもよくわからない。ただし、これまでずっと「知の再生産システム」において「知識を伝播」してきた大学図書館が、社会や科学の発展にその循環の中心を担って貢献しようとするその熱意は、それこそが大学図書館（職員）特有の誇るべき魂だと思っており、その気持ちが一番大切ではないかとも思っている。
大学図書館ができることは、まだたくさんあると思っており、全体のコミュニティとしても社会や科学の発展に貢献していきたい。